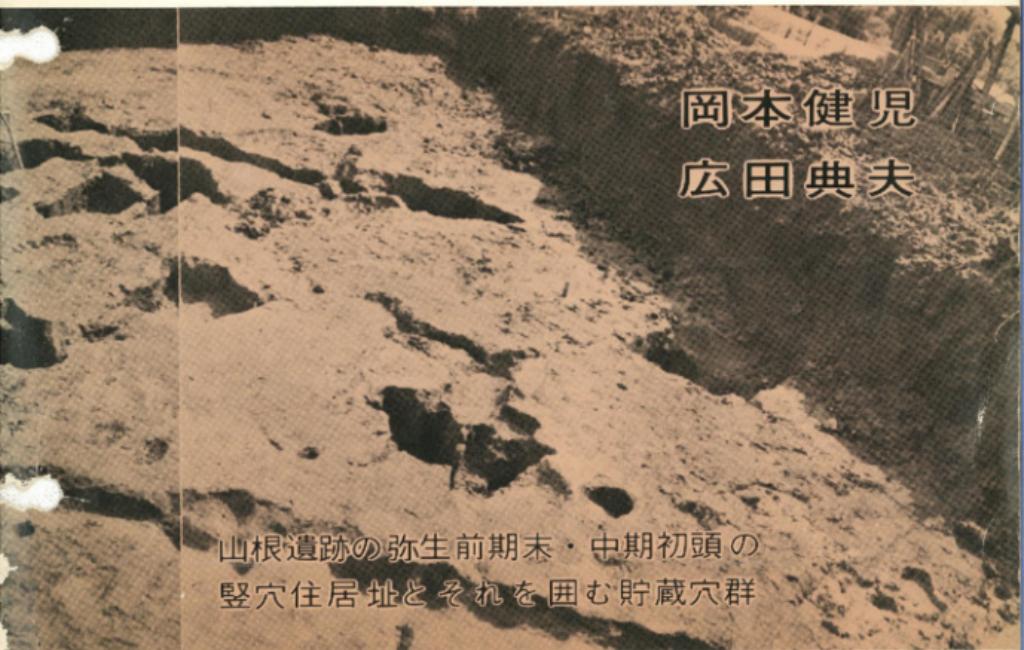


山根・石屋敷遺跡

(付)馬場末遺跡

岡本健児
広田典夫



山根遺跡の弥生前期末・中期初頭の
竪穴住居址とそれを囲む貯蔵穴群

春野町教育委員会刊

昭和 51 年 3 月 31 日 1976

序 文

昭和32年、秋山山根の川島良水氏が、自宅屋敷内に漬物製造用の地下タンク工事中に土器片を発見、鑑定の結果弥生時代の遺物とわかり、山根に相当広範囲な遺跡があることが確認されました。

以来10数年町教委は、未調査のまゝすごしてまいりました。昭和48年ようやく埋蔵文化財に対する認識が高まり、高知女子大岡本健児教授、高知ろう学校広田典夫教諭らの協力を得て、第一次調査を実施、49年二次、50年三次と予備調査を続けてまいりました。

51年3月、宅地造成、道路改良がすすむなかで、緊急調査の必要にせまられ、国・県の補助事業で本格的な調査を実施いたしました。

調査の結果、吾南平野最初の縄文時代の土器の発見により、春野町の歴史は1000年さかのぼりました。

なお弥生時代の遺構などが解明され、仁淀川流域での最初の縄作が、春野町山根を中心にして開始されたことなど、多くの成果を得ることができました。

ここに岡本健児、広田典夫両先生の全面的な協力により、調査報告書を刊行するはこびとなりました。両先生に深甚の感謝を申し上げ、本報告書が考古学上の参考資料として、活用されるとともに入々の埋蔵文化財に対する認識が高まることを念じております。

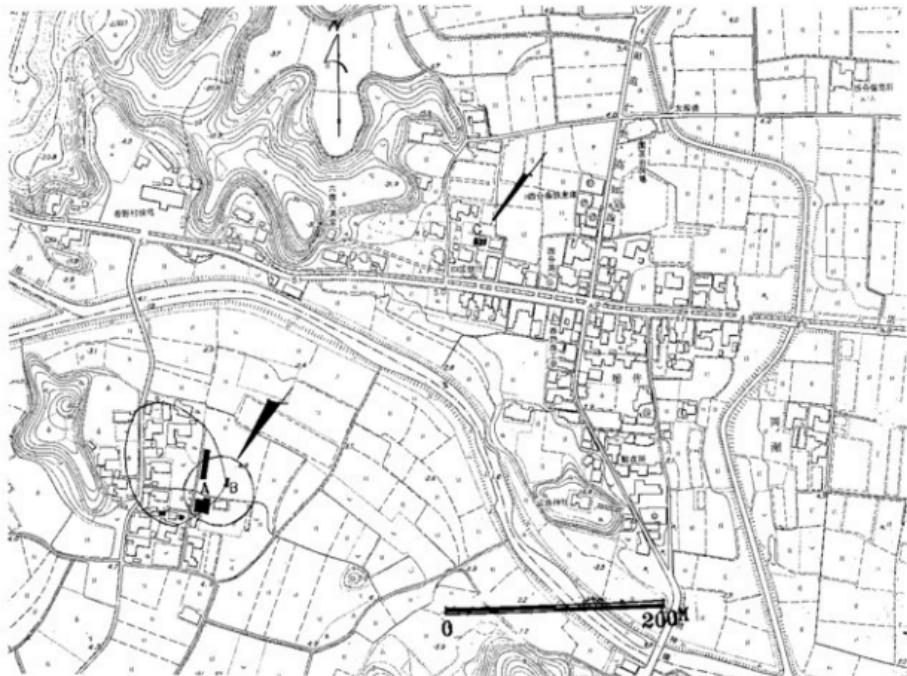
春野町教育長 橋 本 亨



山根遺跡の調査

高知県吾川郡春野町秋山山根遺跡は、地元の川島良永さんの発見で早くより弥生遺跡として知られていたが、昭和48年10月27日～31日に第一次発掘調査、昭和49年2月20日～24日まで第二次発掘調査を行った。これは従来発見されている遺跡の範囲確認のためであった。この遺跡の範囲確認の調査で、われわれは早くも、この当時としては四国では初めての弥生前期の住居址のあることを確認し、これを将来の本格的発掘まで、その全貌をあらわすことを延ばした。(山根遺跡は地図のA地点)

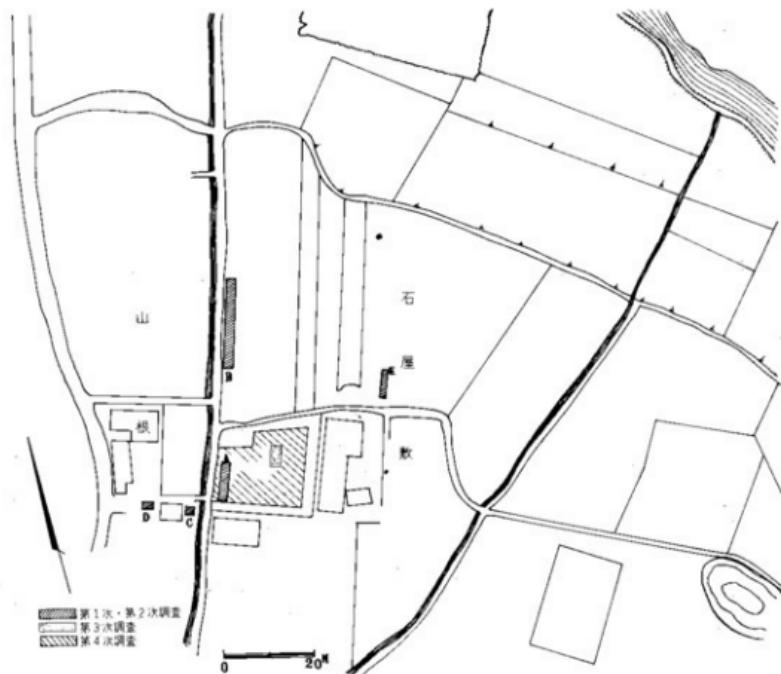
この山根遺跡と併行して、山根遺跡の対岸春野町西分馬場末遺跡を昭和49年8月5日～8日にわたって、主として山根遺跡との関連性を追求するための発掘調査を行った。これらの発掘調査は、町当局の経費によってまかなわれた。(馬場末遺跡は地図のB地点)



山根遺跡と石屋敷遺跡と馬場末遺跡

高知県吾川郡春野町秋山山根の川島良水さんの宅地と同秋山石屋敷の川島一さん所有の畑を中心に、弥生時代前期から終末期にかけての遺跡・遺物が発見される。地図上に椭円形で囲みA地区としたのが、これであってこれを山根遺跡と呼称したい。それに対し、秋山石屋敷の川島一さん所有の畑の東を中心にして、平安時代終末から中世にかけての遺物を包含する地区がある。これは地図上に円形で囲みB地区としたのがこれである。このB地区のとくに有史時代の遺物を出土する遺跡は、石屋敷に所属する地区が多いので、これを石屋敷遺跡と呼称したい。

さらにわれわれの発掘調査は、新川川対岸の同町西分馬場末をも予備的なものとして行っている。ここはまだ予備的な調査段階で、遺跡の範囲は充分にわからないが、古墳時代中期の遺物を主体とする包含層を持ち、これを馬場末遺跡（地図上のC地区）と命名した。



山根・石屋敷発掘地区図

山根・石屋敷遺跡第四次調査

山根と石屋敷は行政的に町道にそった小さな溝によって分けられる。実は第一次と第二次調査で発見した弥生前期の竪穴住居の一部が発見されている川島一さんの畑。從来はこれは宅地であったが宅地化される噂がでてきて、それ以前にこの地区を国から補助金を受けて行政発掘をする必要が生じた。第三次の発掘区は、昭和50年3月9日川島一さんの畑の東部に遺構があるかどうかの確認調査で、これは県の費用でこれを実施した。

国の補助を受けての本格的調査は昭和51年の3月5日より3月19日まで実施した。団にある如く川島一さんの畑の土砂を全部掘りあげ、掘りあげた土砂は休耕している水田を一時借り、そこに置いての発掘であった。この発掘は非常な成功を納め、以下に発表するが如き実績を示した。



1 昭和51年3月5日から19日まで山根遺跡発掘調査の総仕上げの第四次調査を行った。第四次は国・県の補助を受け、機械力を導入し大々的に発掘を実施した。秋山の川島一さん所有の土地170平方mを深く掘り下げる事によって貴重な埋蔵文化財が発見された。



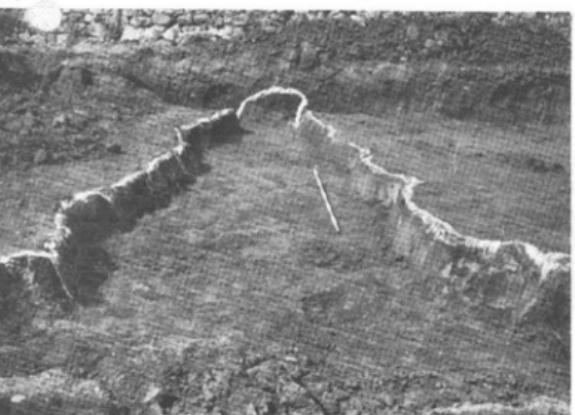
2 約1mほど掘り下げる、幅70~240cm長さ6.5mほどの溝のような落ち込みと思われるものが発見された。この落ち込みだけは、周辺の土の色と異って真黒であり、特に多くの木炭片が混入されていた。



3 この溝のような落ち込みをすこし掘り下げる、木炭片の混入した真黒い土の中から、土師器梶の高台の部分が相接して出土した。もちろんこの土師器の梶は、歴史時代のもので中世（鎌倉・室町時代前半）に位置づけてよいものである。



4



5



6

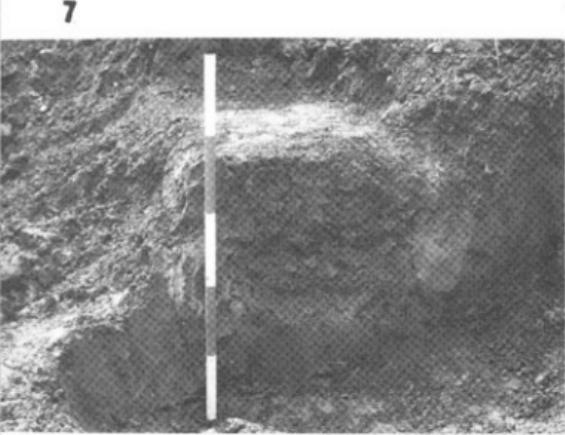
4 なお掘り進んでいるうちに、器形の復原のできる土師質の椀を発見する事が出来、二枚の古銭も発見する事ができた。一枚はわが国で鋳造した延喜通宝、一枚は中国の北宋で鋳造した元豊通宝で、ともにわが国の平安時代に鋳造されたものである。

5 この溝のような落ち込みを完掘してみると、深さ20cm程度のただの掘り込みということが判明した。では一体この掘り込みは、何の遺構であろうか。この掘り込みには焼けた木炭片が多くみられ、また出土した遺物は二枚の古銭のほかはほとんどが割れているという状況で出土している。この出土状況がこの掘り込みの鍵を解く一つの鍵とみられる。

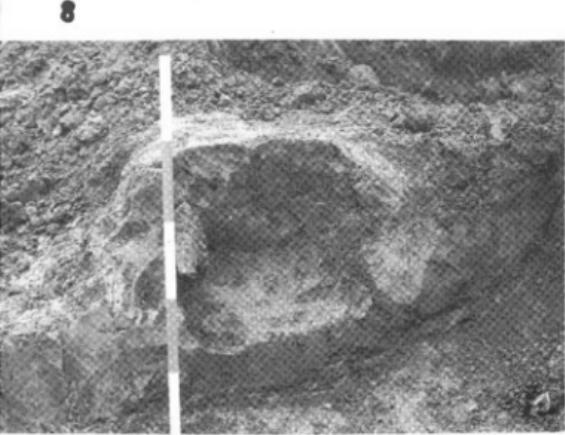
6 この落ち込みを発掘中、出土した遺物のなかの压巻は、天目茶碗の発見であろう。まず最初に小さな破片が、土の中から顔を出したが、そして土砂を除去した時の天目の色調と模様は非常に美しかった。その瞬間の写真がこれである。この写真でみると、この天目は油滴天目とみられそうであるが、全部を取りあげ胎土や釉・器形を検討した結果、瀬戸天目であることが明確になった。この瀬戸天目がこの溝状遺構の年代の一つの決め手となる。



7 天目茶碗の底部は、先に発見された天目茶碗の口縁よりも約20cm程離れて出土した。この二箇所から発見された天目茶碗は、一つの茶碗としてつながるが残念ながら完器にはならない。

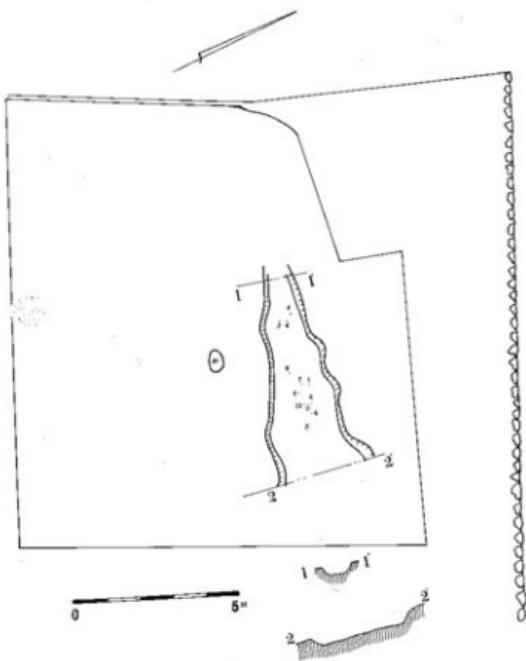


8 溝状遺構のすぐ南方に上部径65×40cm、深さ40.5cmの楕円形の小ピットが発見された。このピットの内には小礫まじりの灰黒色土層が堆積し、そのなかに多くの木炭片と土師製杯の破片がみられた。



9 このピットを掘り下げるとき、先に述べた溝状遺構と同様に、その下部は黄褐色土層である。いわば中世の遺構である溝状遺構にしても、小ピットにしても黄褐色土層を掘って作られたものである。

第四次調査で出現した中世の遺構

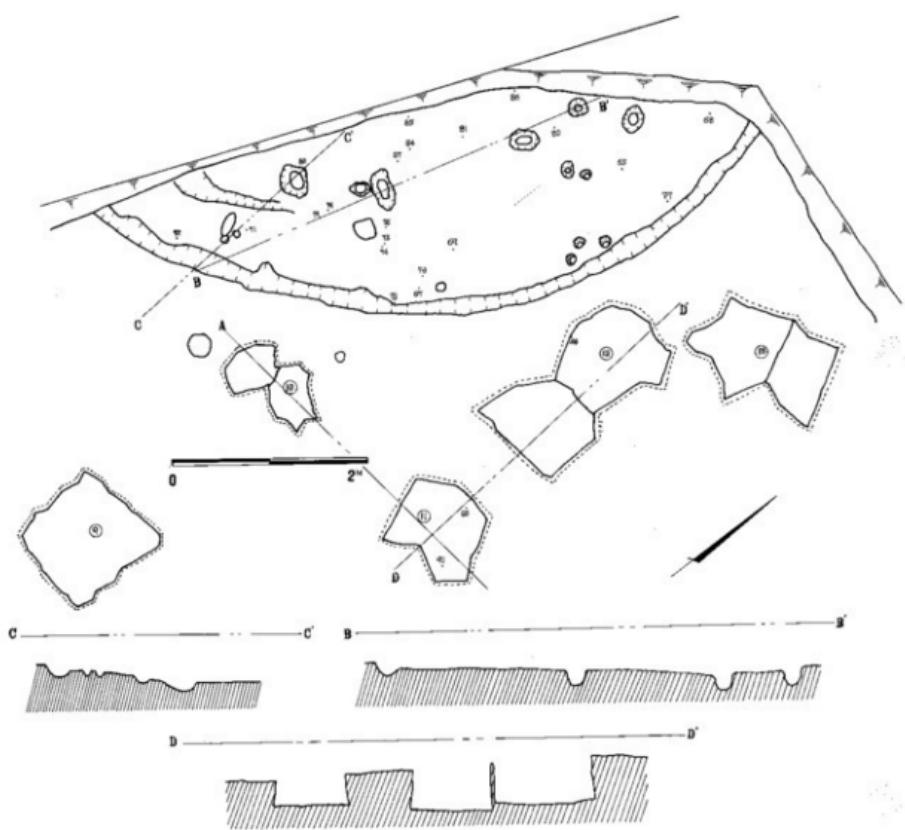


第四次調査で出現した中世の遺構実測図

写真で説明した中世遺構の実測図である。

主要な出土遺物は、出土地点番号で 1 上師質碗、2 土師質碗高台、3 土師質碗高台、4 須恵器底部、5 須恵器、6 上師質碗、7 須恵器甕、8 宋銭（元豊通宝）、9 天目茶碗、10 天目茶碗底部・青磁底部、11 古瀬戸碗底部などが出土している。このほかに古銭では延喜通宝や綠釉陶器も溝状遺構のなかから出土している。溝状遺構から出土する須恵器は平安時代後半のものであるが、併出の天目や青磁などの存在から、この溝状遺構に埋められたのは室町時代に入ってからのことであろう。溝状遺構や小ピットのなかからの遺物の出土状況は、廐棄物を捨てたが如き様相であるので、先述した木炭片の多いことと併せ考えて、石屋敷地区での火災後、火災地の整理としてこ

れらの溝や小ピットが掘られ、火災にあった廐棄物が棄てられたのであろう。それは遺物からみて、室町時代でもあまり遅くない中葉の時期とみられる。



山根遺跡の前期弥生期の竪穴住居とそれに伴うピット群

豎穴住居址とピット群

第四次の発掘調査で発見された豎穴住居の床面から発見された主な遺物は、次の通りである。

72大篠式土器口縁, 71大篠式上器, 70田村式上器, 79田村式土器, 83田村式土器, 83田村式土器, 74田村式土器口縁, 75田村式土器片, 76田村式土器片, 78砥石, 67大篠式土器片, 73田村式土器片口縁, 69田村式上器, 87石庵丁未製品, 84砥石, 85砥石, 81ヒビノキⅡ式土器彫形, 86太形船刃石斧, 80砥石, 65大篠式土器片と敲石, 77大篠式土器と木炭, 68打製石槍。

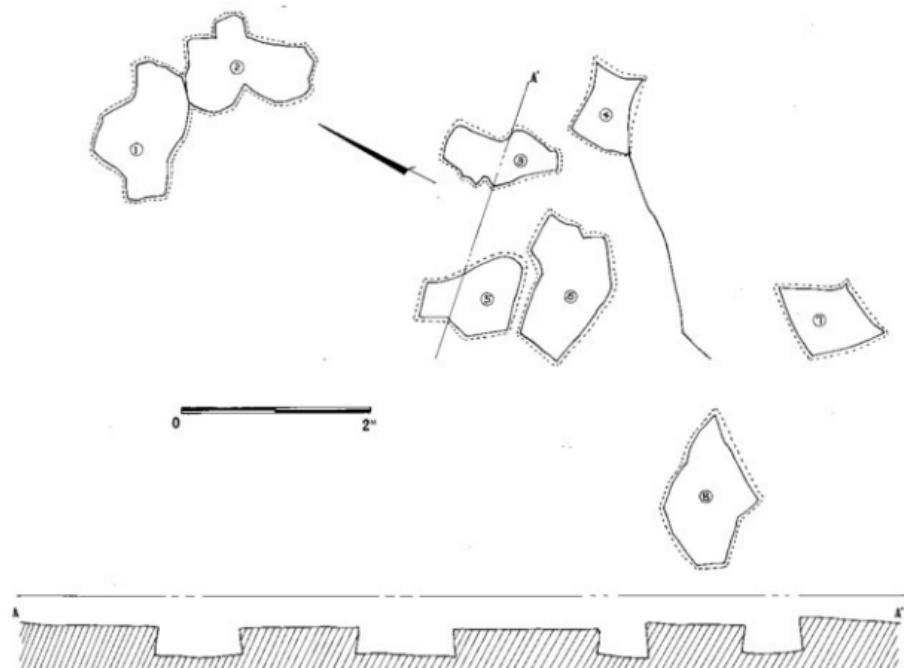
以上の豎穴住居床面から出土した遺物のうち、とくに土器片をみると本地方の弥生前期後半の大篠式土器とそれにつづく弥生中期初頭の田村式土器である。このことから本豎穴住居址は、大篠式土器の時に作られ、田村式土器の時期まで住った住居址とみてよかろう。

ただ弥生後期後半のヒビノキⅡ式土器が、住居址床面近くから発見されているが、これは弥生後期後半時におけるなんらかの原因による擾乱とみてよかろう。

豎穴住居は三分の一程度しか発見されていないが、それ以西の部分は道路と側溝のため遺構自体が破壊されていると思われる。柱穴と住居址内の周溝がみられる。

この豎穴住居址に接して、13個の貯蔵穴とみられるピットがみられる。11の貯蔵穴からは88大篠式土器片, 91大篠式土器片が、12の貯蔵穴からは、66大篠式土器頸部が出土しているので、これらの貯蔵穴は豎穴住居と同時期のものと考えてよかろう。なお13の貯蔵穴9の貯蔵穴を粘土の床面を掘り下げるとき、厚い砂層になり、その砂層のなかに後期中葉の繩文土器片が数片発見された。この砂層は洪水によって生じた層であり、繩文土器は洪水によって運ばれたものであろう。そしてこの繩文土器を使用した入たちは、山根の南面の丘陵に住んでいた可能性が強い。(第2図参照)

数多くのピット群



山根遺跡弥生前期ピット群

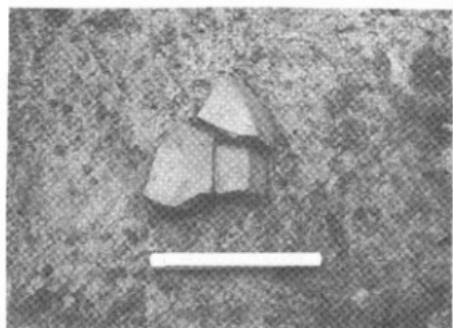
豊穴住居に伴うピット群は、先述したように13個の数量を数えることができた。そしてそれらのピット群は現在のところ、住居址の東側にのみ発見されるようである。山根遺跡のピット群は、その形態が完全な方形でもなく円形でもなく、いわゆる変形をなしている。この原因は本遺跡の地層と、それによって作られるピットの作り方にあると考えられる。またピットの深さが、南国市田村西見当遺跡のピット群と比較して、非常に浅く30cm前後の深さである。このことも先述した遺跡の地層とその作り方に原因している。なお注意すべき事は、⑤のピットに例をとって述べると、ピットの上部径58cm、そして底部径66cmであって、いわゆる袋状の部類に属するものとみてよかろう。④ピットの西南にかけて、羽目板を打ち込んでいた痕跡が、長さ3cmにかけてみられた。何がゆえにこのような事をしたか、今のところその理由はわからない。

竪穴住居址と後期弥生土器



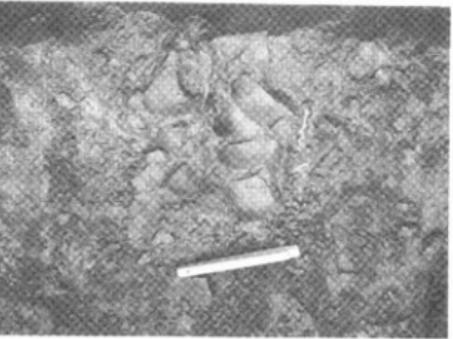
10

10 町道のために竪穴住居址は、たぶんその西半分は破壊されているのであろう。先述したように、住居址直上の土器のほとんどは、大底式土器とそれにつぐ田村式土器であるので、この住居址は、弥生前期末から弥生中期初頭のものと考えられる。



11

11 貯藏穴 1 の上部から弥生後期終末ヒノキ II 式土器の高杯形、それも杯部がうら返えしで出土した状況である。その高杯をのけ、掘り下げるに弥生前期末から中期初頭にかけての貯藏穴が姿をあらわすのである。



12

12 住居址床面にはほぼ接して、この弥生終末期のヒノキ II 式土器が一個体出土している。住居址面の No.81 がその出土地点である。上からつぶされたような状況で出土している。

住居址床面よりの石器出土状況



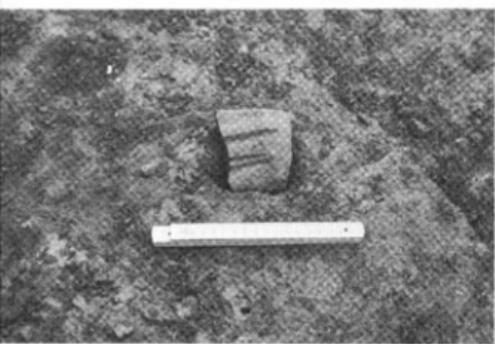
13

13 粘板岩を打次いで作った打製石槍の出土状況である。尖端部と基部を折損している。あるいは折損後、するどい両方の刃をスクレバーとして使用したかも知れない。住居址床面のNo.68より出土する。



14

14 軟質粘板岩の円礫を砥石としたもので、砥石使用済みのあとは、敲石として利用されたもので、その出土状況である。床面のNo.78より出土する。



15

住居址と貯蔵穴——その1——



16

16 弥生前期～中期初頭の住居址に伴う貯蔵穴が13個ほど発見されている。住居址に相接して、住居址をとり回む恰好で貯蔵穴がある。また貯蔵穴に接して溝状の掘込みがあるが、これは一体何に利用したものであろうか。



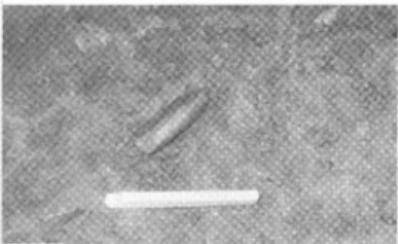
17

17 町道の下、ポールの置いてある所が、住居址の床面である。住居址の壁は床面より余り高くないのが、南四国の大山時代を通じての堅穴住居の一つの特色であろう。この住居址の床面よりも、やや深く貯蔵穴は掘り下げている。

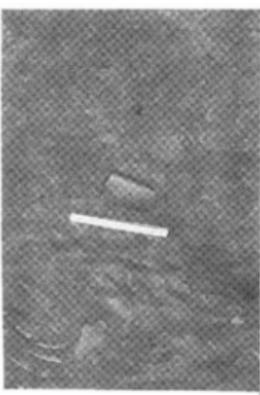


18

住居址と貯蔵穴——その2——



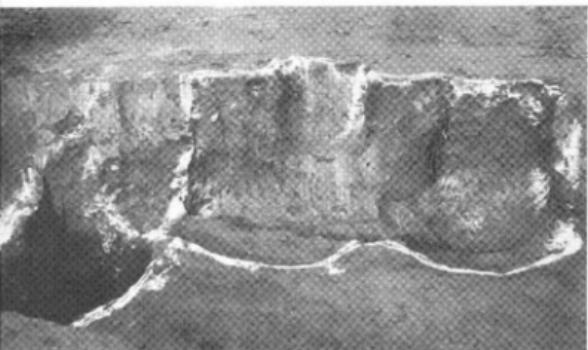
19



20



21



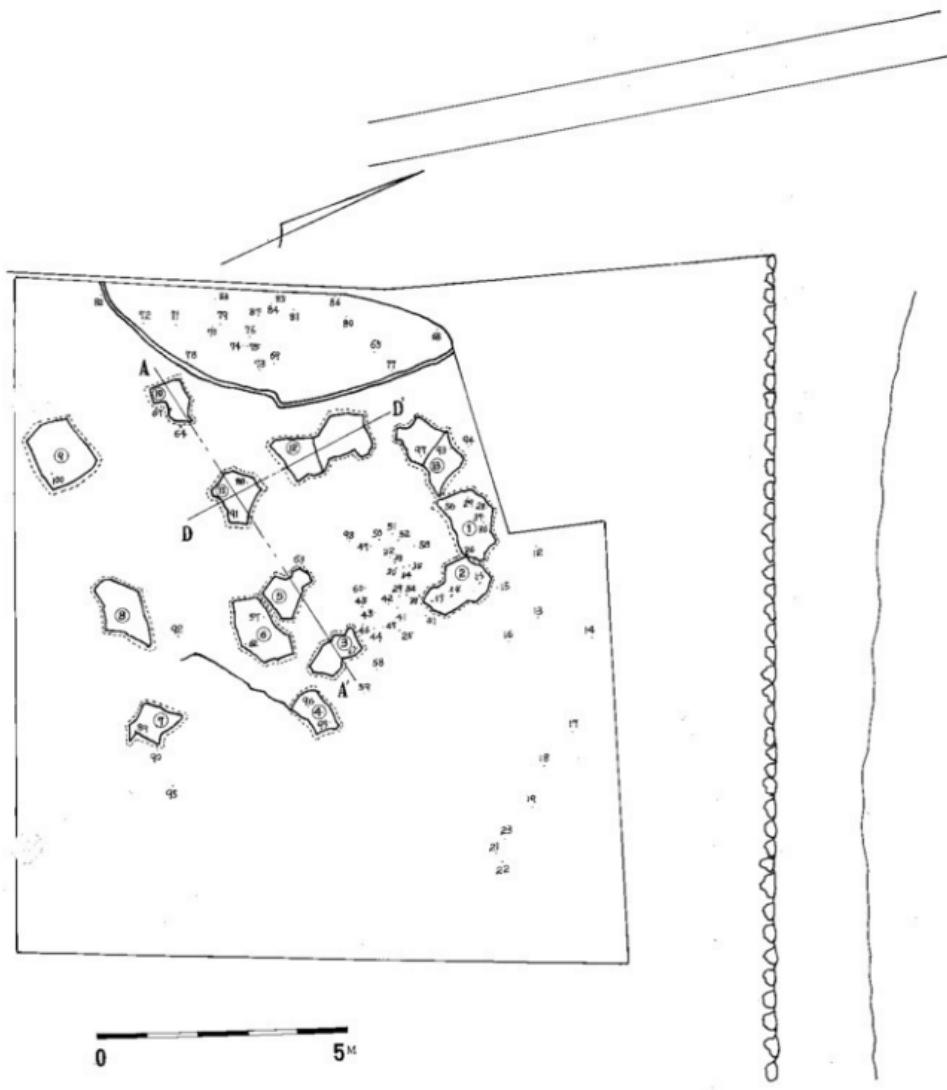
22

19 住居址床面より出土した大型蛤刃石斧。住居址上No.86から出土している。

20 また貯蔵穴1の底部から出土した大型蛤刃石斧。貯蔵穴No.37より出土する。

21 貯蔵穴5・6を上から写したもの。ポールを立てた貯蔵穴が6である。この6の貯蔵穴の底部から大縫式土器片がNo.57から出土し、さらに貯蔵穴の底を抜いて砂層にいたると、繩文土器が出土した。繩文土器は貯蔵穴の上部から1.5mの深さから出土している。

22 貯蔵穴1と2の写真である。とくに貯蔵穴2の一方の壁面をこわして、貯蔵穴の壁面を写した。なお貯蔵穴の床面もすこし掘り下げたところである。この発掘によって側壁の化粧板としての羽目板は、矢板でなく一字文字状の板で、幅18cm、高さ23~24cm程度のものであることが判明した。



山根遺跡（住居址と貯蔵穴群実測図）

住居址と貯蔵穴実測図

住居址とそれに伴う貯蔵穴を一枚の図に示したものである。○の中の番号は貯蔵穴番号である。○印のない番号は主要な遺物出土地点である。住居址内の出土遺物については、すでに述べたのでここでは貯蔵穴とそれ以外の出土遺物を紹介する。

貯蔵穴① 26ヒビノキⅡ式高杯, 28田村式土器片, 29砾石, 36大縫式土器口頭部, 37太型鉈刃石斧, 56大縫式土器片

貯蔵穴② 24大縫式土器片, 39大縫式土器剥離部破片, 55打製石鎌

貯蔵穴③ 61打製石鎌

貯蔵穴④ 96田村式土器口縁, 99田村式土器破片

貯蔵穴⑤ 貯蔵穴の外63田村式土器底部

貯蔵穴⑥ 57大縫式土器片, 62繩文土器（深い所から出土）

貯蔵穴⑦ 89大縫式土器片, 貯蔵穴の外90大縫式土器片, 95神西式土器壺形破片

貯蔵穴⑧ 貯蔵穴の外92大縫式土器片

貯蔵穴⑨ 100繩文土器（出土層位深し）

貯蔵穴⑩ 67大縫式土器片, 貯蔵穴外64繩文土器片（出土層位深し）

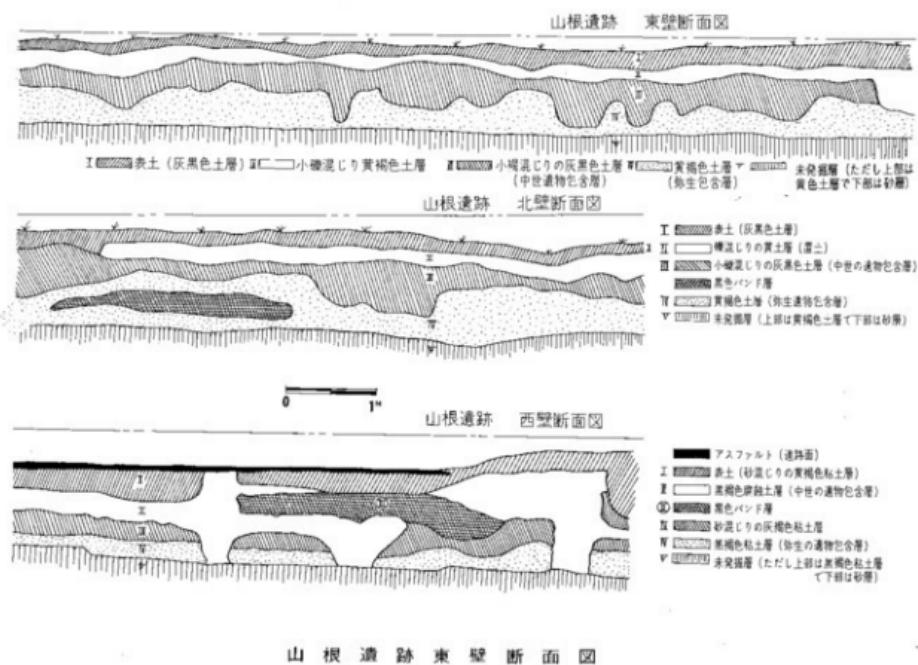
貯蔵穴⑪ 88大縫式土器壺と甕の破片, 91大縫式土器片

貯蔵穴⑫ 93大縫式土器片, 97大縫式土器口縁, 貯蔵穴外94康熙通宝（層位浅し）

貯蔵穴に開まれた平坦地, 98大縫式土器口縁, 49大縫式土器片, 50大縫式土器片, 51大縫式土器片, 52田村式土器片, 53田村式土器口縁, 32大縫式土器底部, 33敲石, 30扁平敲石, 34大縫式土器底部, 35神西式土器口縁, 60扁平敲石, 27大縫式土器口縁, 54田村式土器底部, 45大縫式土器片, 42大縫式土器底部, 38壺形土器片, 43大縫式土器片, 41大縫式土器片, 46大縫式土器片, 47大縫式土器片, 31大縫式土器口頭部, 44大縫式土器片, 25大縫式土器口縁, 58神西式土器口縁, 59北カリヤ式土器片。

北部および東部 12神西式土器口縁, 15大縫式土器片, 13大縫式土器頭部, 16大縫式土器口縁, 14大縫式土器口縁, 17ヒビノキⅡ式土器片, 18ヒビノキⅡ式土器片, 19田村式土器片, 23神西式土器頭部, 21ヒビノキⅡ式土器片, 22神西式土器口縁。

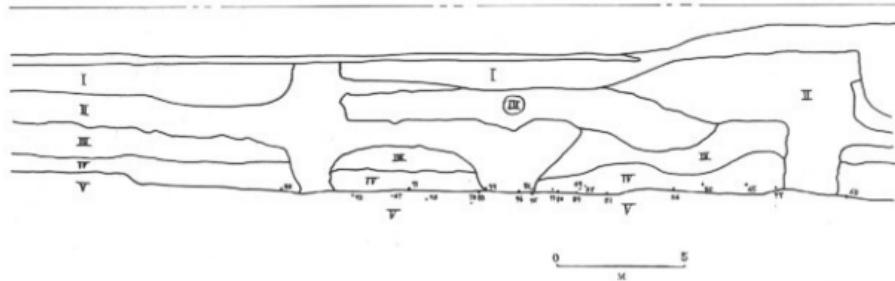
層位断面図（山根遺跡）



山根遺跡 東壁断面図

住居址および貯蔵穴出土地の層位断面図を掲げた。上段はその東壁、中段はその北壁、下段はその西壁の断面図である。中世の遺物包含層・弥生遺物包含層そして縄文遺物包含層が層位を異にしている点は面白い。黒色バンド層と名づけた真黒い層が、IV層ないしV層にサンドイッチ状に挿入されているが、これは無遺物層である。この層がどうして出来たか、現段階ではまだ解明できないでいる。

山根遺跡層位断面と遺物出土地点の関係



山根遺跡西側断面における主要遺物出土層位

山根遺跡西側断面は、竪穴住居上の層である。この部分の層を特に取り出して、出土した遺物の層位的な出土点を参考までに図示した。番号は竪穴住居上や貯蔵穴上におとした番号と同一である。ただしこの場合中世遺物については番号をおとしていない。またNo.64はその層位が深いのは、繩文土器であって砂層より出土している。

山根遺跡層位断面写真



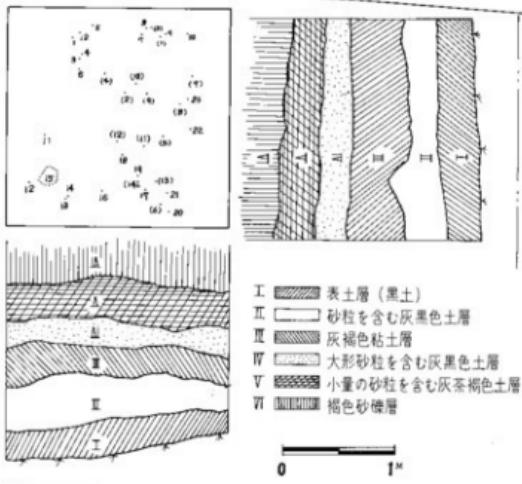
23



24

竪穴住居址および貯蔵穴出土地区の層位断面写真の一部である。23は山根遺跡の東壁の断面を写したものであり、24は同じくその北壁の一部の断面を写したものである。断面実測図と比較検討いただきたい。

第一次・第二次調査のC区断面図



竪穴住居址の出土した地区と第一次・第二次調査で発掘したC区とは、距離的に10m程度しか離れていないが、発掘の結果は層位的に差異があることが明確になった。C区で番号を打っている土器出土地点は、ほとんどすべてが大輪式土器と田村式土器であって、これらは第V層の小量の砂粒を含む灰茶褐色土層にのみ包含されるのである。この第V層が山根遺跡北壁断面図の第IV層に該当するのであろう。なおC区断面図15の破線部は炉址状を呈したいため、このC区を広く発掘するといま一つ住居址の可能性もあるが、周辺が墓地であるのでこれ以上の広さに発掘する事はできなかった。

なおC区では第IV層（大形砂粒を含む灰黑色粘土層）より神西式土器片が出土しているところから、山根遺跡では数度の大洪水を経験していることがわかる。すなわち縄文時代後期の大洪水、これによって山根の小山丘の舌状部に住んでいた縄文人の遺跡が破壊され、前期弥生期の遺構下の砂層に当時の遺物が流され埋没している。また発見された弥生前期末～中期初頭の住居址と貯蔵穴も洪水によって、埋没されたと思う。ただこの場合の洪水は縄文期にみられる洪水と違ってやや小規模のものと解釈される。というのはC地区でのこの弥生前期～中期初頭の遺物の発見される層は、小量の砂粒を含む程度であり、住居址や貯蔵穴上の砂粒の堆積はすくないからである。

そして弥生中期終末の神西式・龍河洞式土器の時期に、大きな洪水があったらしく、それらの出土する層には砂粒の堆積がみられる。この時期の洪水は大きかったのであろうか。これにつづく後期初頭の弥生土器は山根遺跡から発見されていない。このように縄文期から弥生期にかけて数度の大洪水に、山根遺跡が見舞われたのは、近くに大河川——古代の仁淀川が山根遺跡に接して流れているからと考えたい。

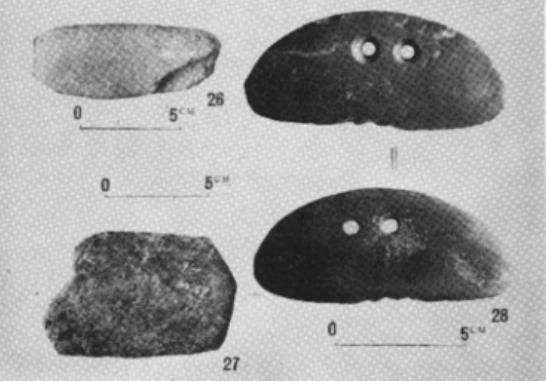
貯蔵穴・石錘・石包丁



25

25 1は貯蔵穴13である。最長1.48m,

最大幅98cmである。写真でみると二つの貯蔵穴のようにみえるが、実は中央に地を残しているところは、片面に羽目板痕があって、そこには本来三枚の羽目板（幅70cm）が立てられて、この一つの貯蔵穴を二つに組切ったとみられるのである。深さ40~50cmである。



27

28

26 貯蔵穴9の底をくりぬき、深さ1m

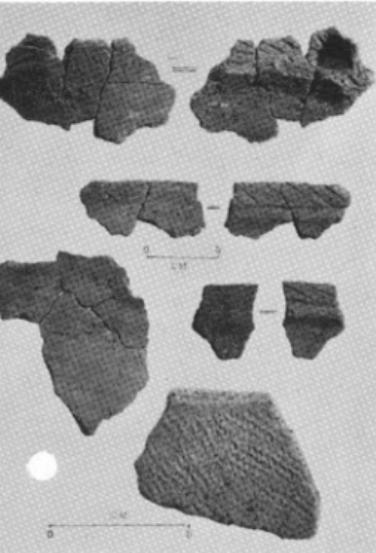
の砂層のなかから出土した砂岩製の石錘である。出土層位から縄文後期の彦崎K I式土器に伴うものであろう。両端を簡単に打欠いだものである。

27 結晶片岩で石包丁の作りかけとみられる、双部はすでに打ち欠ぎによって、するどくなっている。これを磨き孔をあけ稲の穂をこぐ石包丁としたのである。住居址床面より出土している。

28 川島良水さんの邸宅内で、発掘区C

地区の西数m離れたところから、偶然に発掘された磨製石包丁である。この

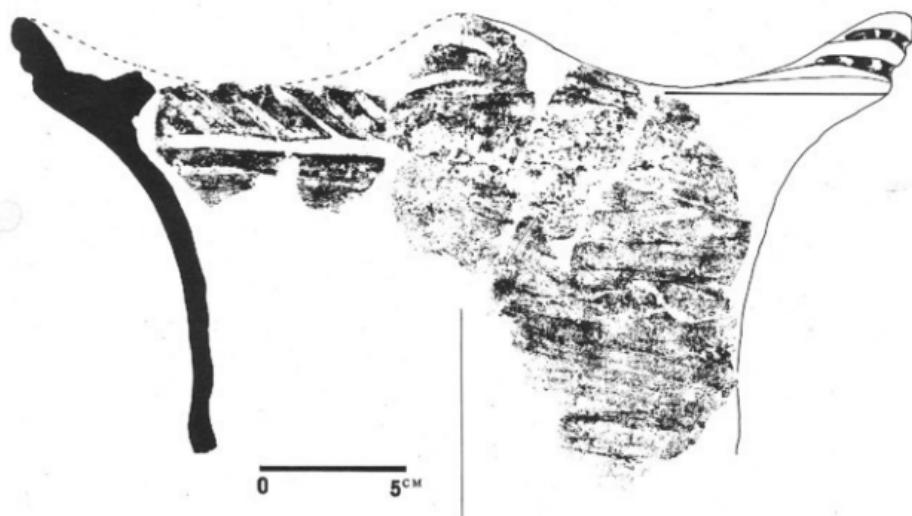
石包丁と伴出の土器は大窓式土器・田村式土器それに北カリヤ式土器、神西式土器そしてヒビノキII式土器であるが、この石包丁の型態からして弥生中期中葉の北カリヤ式土器に伴うものとみてよかろう。石質は粘板岩製である。



縄文土器

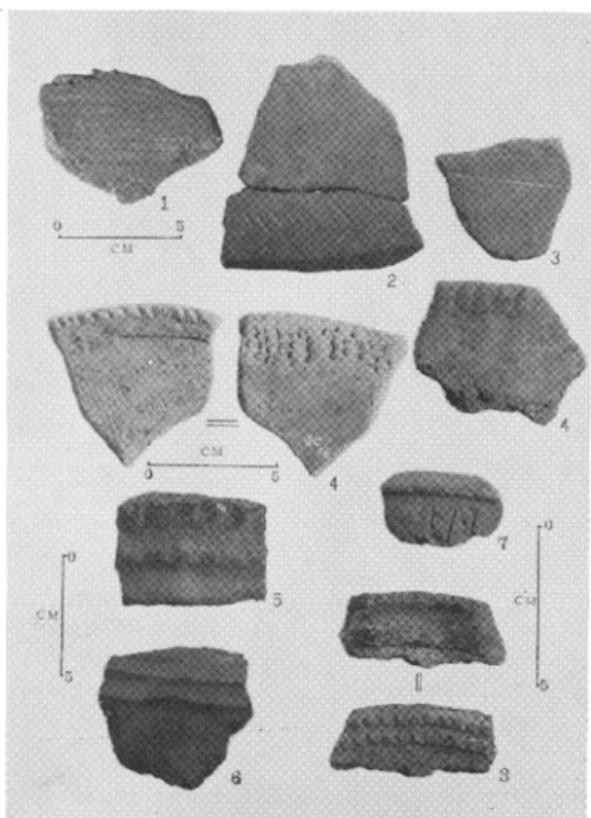
ピットの下層（砂層）から出土した縄文土器群で、後期中葉の縄文土器一彦崎K I式土器に該当する。口唇に幾何学文を入れた縁帶文土器と頸部無文の全縄文土器の二種類が発見されている。頸部無文の全縄文土器と縁帶文土器とは、図の縮尺を異にしている。重要な事は、縄文後期において山根遺跡のような南四国中央部以東では、九州の鐘ヶ崎式土器の混入がみられず、まったく瀬戸内的な土器のみの分布地域をなすことが、これらの土器群の出土で判明した。復原図の縄文土器は、波状口縁を持ち、外面には波状頂部に文様を持つ。また口縁内面には、突

帯を持ち、口縁端からこの突帯までに太い斜行沈線文を持つものである。(20・21)



山根遺跡出土の縄文土器実測図

晩期縄文系土器と前期弥生土器

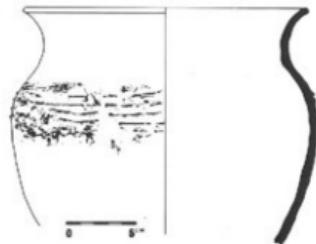
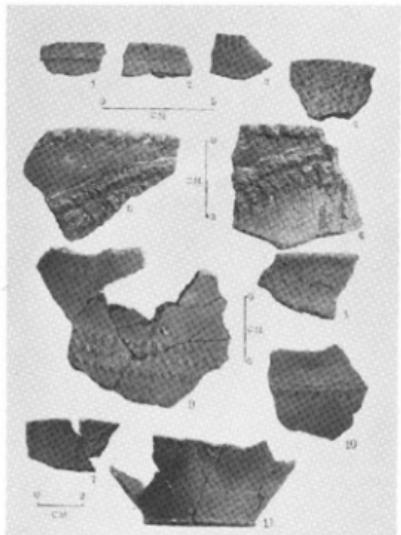


遺跡では未発見である。

5～8までの弥生土器は、弥生前期後半に位置づけることのできる大篠式土器である。4は口縁外反し、口縁部を複合口縁状にする。しかも拡がった口縁内面には、竹管の刺突文で飾っている。8の土器の口縁内面に貼り付け突帯を持ち、それに刻目文を入れたものである。5・6・7の如く突帯を持ち、これに刻目文のあるもの、刻目文がなく断面三角形の突帯のものもある。7は継平行線がみられる。4～8はすべて壺形破片である。

同一縮尺である1～4の土器のうち、1の土器は入田B式土器とみられる縄文系土器である。最近入田B式土器が南四国でも、中央部の前期弥生遺跡から断片的に発見されるようになったが、それが中村市入田遺跡のように南四国最古の弥生土器入田I式土器と併出するように出土するかどうか、現段階では明確でない。2の土器は胴部破片で、竈拂羽状文を持つ前期土器であり、1の土器とD地点東部で併出したが、その後の調査で付近は近時における擾乱層であることが判明した。3・4は2の壺形に伴う甕形土器で、最近の研究では弥生前期中葉に位置づけるところの西見当II式土器とみられる。これら2の土器は、今のところ擾乱層から出土する。なお南四国中央部および東部の最古の弥生土器—西見当I式土器は本

大篠式土器—1—



大篠式土器壺形実測図

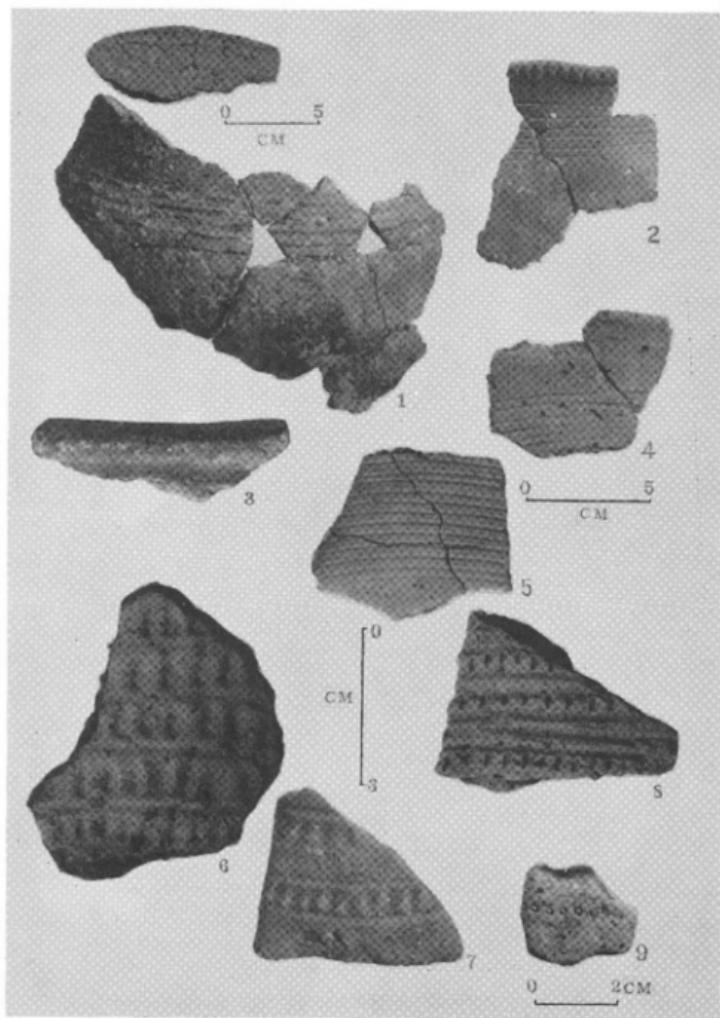
23 発見された住居址および貯蔵穴から出土するものは、前期後半の大篠式土器が多い。1～5・7／8のグループと5・6それに9～11は、その縮尺が異なる。褐色ないしは黒色の薄手の土器に、貼付突帯の盛行する一群である。口縁端に小さな列点文また貼付突帯をつけ、それに列点文を持つものもある。5・6の口縁部は住居址床面より出土したもので、貼付突帯による二条の重弧文を持っている。4・7は口縁から頸部にかけて、継平行線の突帯を持つ。10の肩部の突帯には豆粒状の貼付文がみられる。8はこれらの大篠式土器と中期末の神西式土器の口縁部や胎土・砂粒の混入状態の違いを示すために、意識的に神西式土器を一つ混入させた。すべて壺形で、11は大きな平底である。

24は1の壺形土器の実測図である。2は写真に図示していない大篠式土器壺形の実測図で開いた口縁が特色である。口縁の端の上下に細い施描の沈線が入っている。住居址の床面から出土した土器である。



大篠式土器壺形実測図

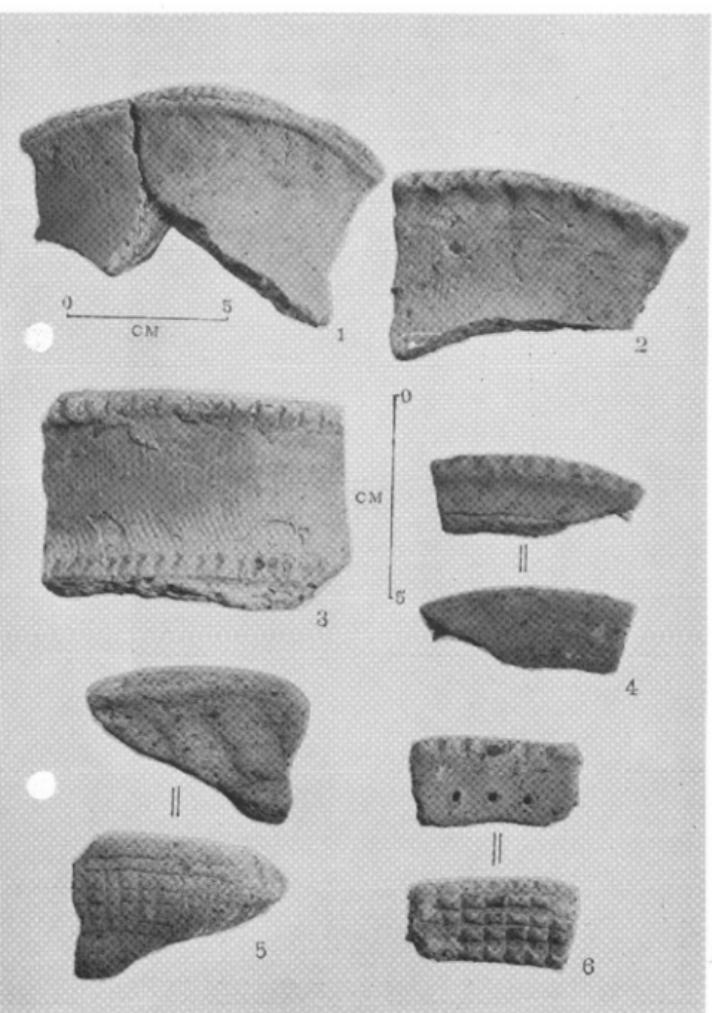
大篠式土器—2—



1は薄く作った大篠式土器の壺形で、口縁外反し、上胴部に四本の断面三角形の突起がみられる。2・3は壺形土器で、2の場合は口縁に列点文を持ち頭部は如意形をする。頭部には六条の施描沈線がある。口縁の列点文は刷毛目施文原体で、押圧している。胴部はやや張るところに特色がある。3は逆L字状口縁で、北四国の阿方式土器によくみられるものである。4～9は壺形の頭部および胴部の文様部を集めたもので、施描平行沈線文・施描平行沈線文間に列点文を持つもの、小さ

な円形状竹管文などがみられる。ここでは3の壺形土器の存在で、南四国の大篠式土器は阿方式土器と深い関係にあることが言えよう。

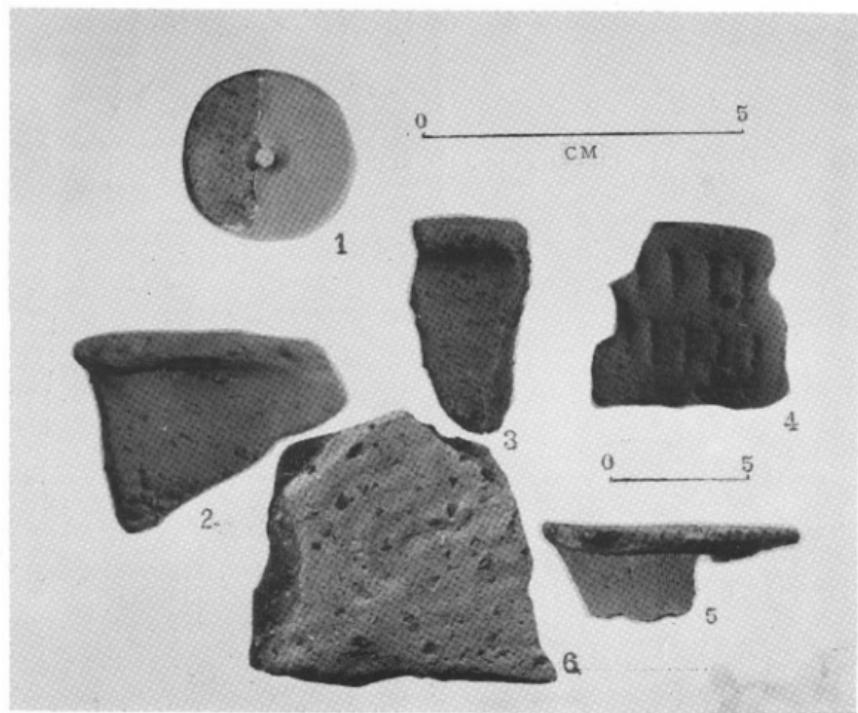
大篠式土器—3—



大篠式土器の壺形で、
5以外はすべて外反する口縁に列点文を持つ。
1・2は口唇下に指頭圧痕が残っている。3
は口縁下から頸部まで
を一段高くし、頸部に
も列点文を持つもので
西見当工式土器の伝統
を受けついだものであ
る。4、5は口縁下を
一段高くしたもので、
これも西見当工式以降
の伝統である。5は口
縁に列点文を持たない
かわりに、一段高くし
た口縁下に範による平
行短斜線文が入れられ
る。6は拵がった口縁
端に近いところに、孔
を数多く持つ土器であ
る。この孔は上下貫通

している。このような有孔壺形土器は、大篠式土器とそれにつづく中期初頭の田村式土器に
圧倒的に多い。5、6は拵がった口縁の内側に範描の格子文、列点文を入れた貼付突帯で飾
っている。

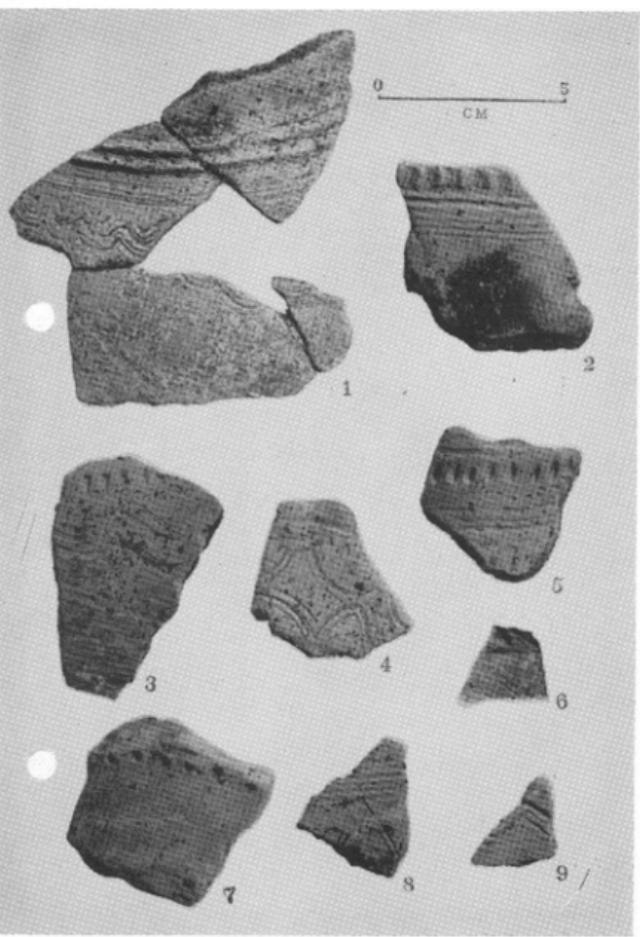
紡錘車と大篠式土器と田村式土器



1は住居址炉近くから出土した紡錘車で、出土状況から大篠式土器に伴うものである。

2～3は逆L字状口縁の甕形土器で、先述したように北四国の阿方式土器によくみられるものであるが、南四国この種の土器は口縁下に庵描沈線文がみられず、無文のものが多いところに特色がある。2の逆L字状口縁の土器は、胎土に砂粒がややすくなり、色調が赤褐色をなし焼成が良くない点から、大篠式土器につづく弥生中期初頭の田村式土器の疑いが濃厚である。出土状況も住居址床面よりも大分ういて出土している。4は田村式土器甕形の外反した口縁内面につけられた文様で、櫛目文施文原体を押圧している。5は大篠式土器の甕形口縁で、口縁端が逆L字口縁の甕と同じように平坦である。6は田村式甕形の破片で、扁状文風の櫛目文がかすかにみられる。

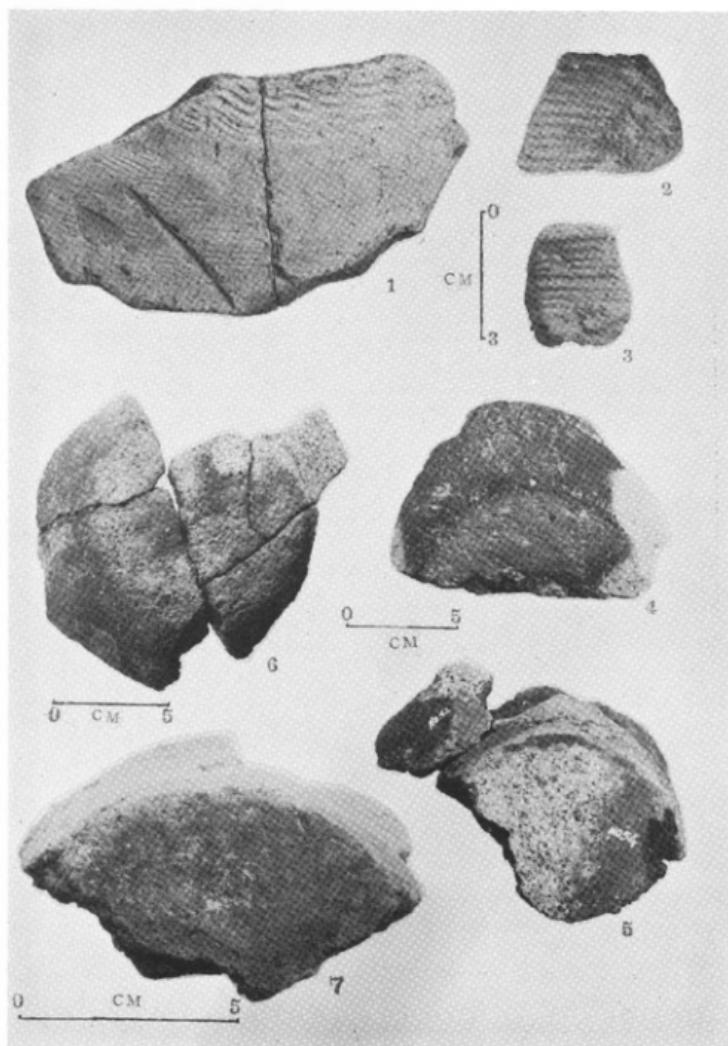
田村式土器 —1—



頂点が山形文風にみえるもの、これに対し 8 は明確に櫛描の山形文である。7 は口縁近くに有孔を持つ壺形である。

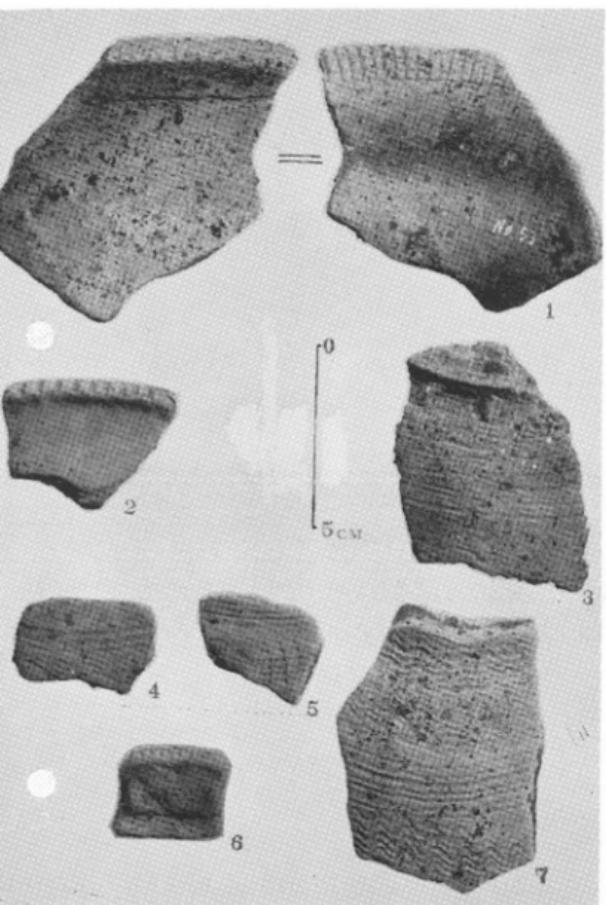
南四国の中期初頭の弥生土器を田村式土器と呼ぶ。器形は大様式土器と大差ないが、文様が施描から櫛描へと移行していく。1～9 すべて壺形土器である。1 は住居址上から出土はしたが、床面直上でなかった。頭部に二条の断面三角形の貼付突帯をつけ、その下に四条の櫛描平行線と五条の櫛描波状文を入れ、さらに内外面を美しく丹影したものである。2 も頭部に文様を持ち、1 の突帯に対し、扁平な貼付突帯を持ち、その下に六条の櫛描平行沈線の入れられたもの、貼付突帯には列点文を持つ。3 は上胴部の文様で、列点文と波状文の組み合せ、4 も上胴部で上弦・下弦の櫛描重弧文を併列させて、波状文的效果をあげたものである。5 は列点文と櫛描沈線文を組み合わせ、6・9 は櫛描波状文であるが、波状部の

田村式土器——その2——



1は田村式土器の壺で、肩に入れられた五条の櫛描波状文がある。2・3は變形土器の頸部破片で、口線部を欠いている。2は十条の櫛描直線文、3は八条の櫛描直線文を持っている。田村式土器も住居址床面から発見されている。底部の4・5は大塗式土器の底部で、大きな平底である。5は全面丹彩の上器である。6は胎土・色調からみて田村式土器である。7は刷毛目痕の縱走した北カリヤ式土器の底部とみてよかろう。

中期弥生土器——その1——



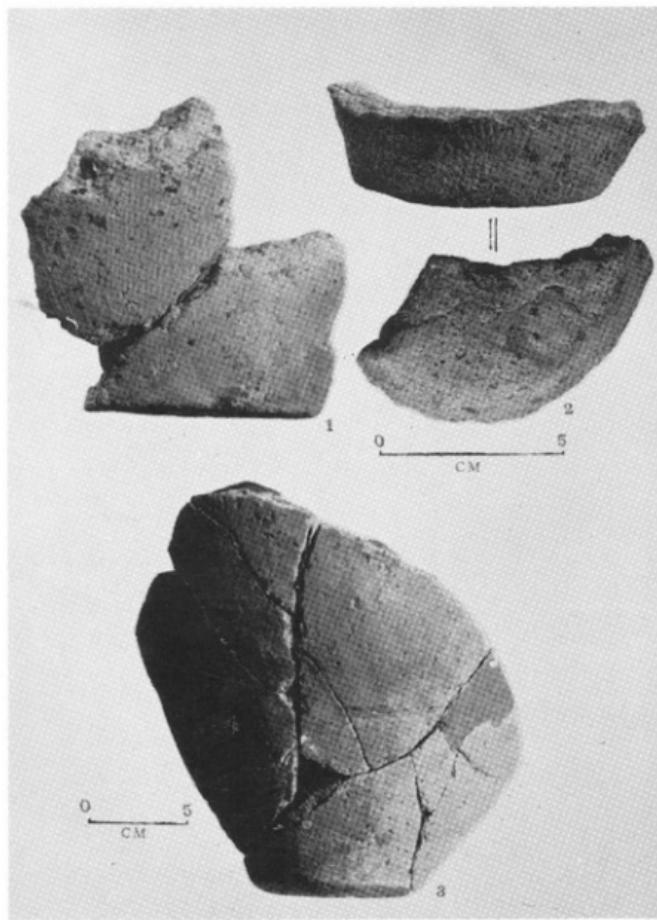
1は中期初頭の田村式土器の口縁部で、外反する口縁に、口縁下端のみに列点文を持つ。口縁下は折り返しの複合口縁で厚く作り、外反した口縁上坦面には、薄い貼り付け帯部に縦に櫛描短線を入れている。内外面丹採の美しい土器片である。

2・3・5は中期中葉前半の城式土器で、2は外反した口縁端に、櫛描施文具による列点文が入れられている。口縁下端は下にすこしたれるのが特色である。3は頸部に断面三角形の突帯を持ち、それに楕円貼布文がある。三条単位の櫛描直線文を三段にわたって入れ、その下に四条の波状文がある。この波状文の下にまた櫛描直線文があるのが、かすかにわかる土器片である。5は櫛施文具を引っぱりながら力を入れてつける籠状文である。

3・4・6は北カリヤ式土器で、6はその口縁であり、これも口縁部近くを折

り返えして複合口縁にし、口縁端には櫛描列点文がある。拡がった口縁坦面には、図示していないが櫛描短直線が入れられている。4は三条の平行櫛描文の上に櫛描山形文、下には櫛描斜線文がある。7は壺形上胴部の土器で、七条の櫛描波状文・五条の櫛描波状文、それに七条の櫛描直線文、さらに五条の櫛描波状文を組み合わせたものである。

中期弥生土器の底部

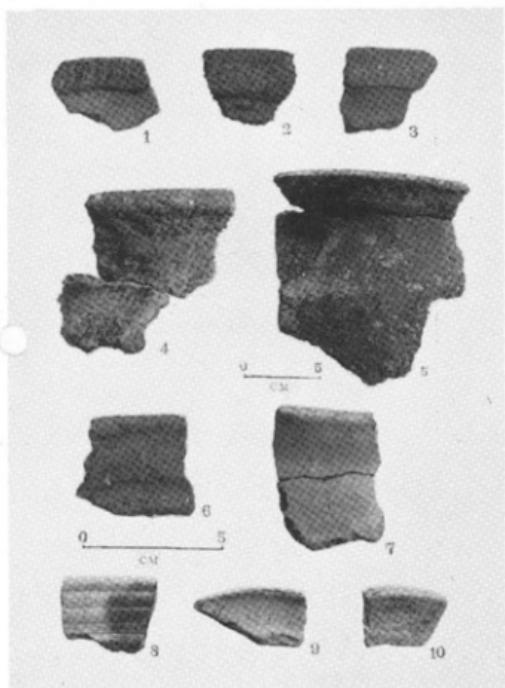


1～3は中期の弥生式土

器でも、その初頭から中葉
までの底部とみられるもの
である。1～2は瓶に刷毛
目痕の走ったもので、底部
の頬のまったく張り出した
ところがみられない。とく
に2の底部は住居址周辺の
貯蔵穴の近くから発見され
(No.34) その胎土・色調か
ら田村式土器の底部とみら
れる。1は城式土器の底部
であろう。

3の底部は表面が研磨さ
れた土器で、C地区の第V
層(小量の砂粒を含む灰茶
褐色土層)から出土したも
ので(No.15)これも中期初
頭の田村式土器底部である。

中期弥生土器——その2——



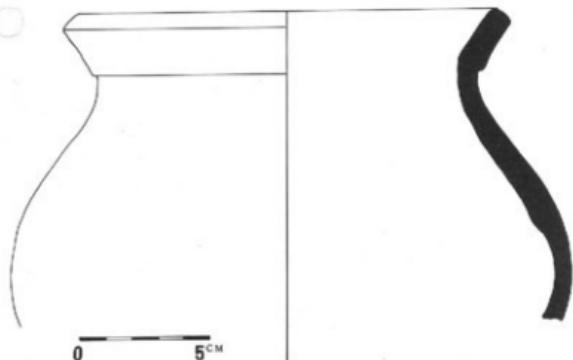
1～6までは南四国西部に主と

して分布する弥生中期末の神西式
土器である。すべて神西式土器の
壺形で、口縁部を折り上げて厚く
作った複合口縁を特色とする。1

・3は複合部に竪排列点文、4は
複合部に指頭圧痕文が入れられて
いる。7～10は南四国東部に主と

して分布する弥生中期末の龍河洞
A式土器で、とくに凹線文の発達
した土器型式である。7は長頸壺
で、口縁端に一本の凹線、8は高
杯の杯部で、立ち上った杯部口縁
下に四本の凹線の入ったものであ

る。9～10は壺形土器で、開いた
口縁部、そして口縁端は上下また
は上部に漏斗状に広がり、これに
凹線を入れたものである。高知県
でも、この山根遺跡付近は神西式
土器と龍河洞A式土器の接点であ
り、その場合の両式土器の出土量
は神西式土器70%に対し、龍河洞
A式土器は30%である。④は5の
神西式土器壺形の実測図である。



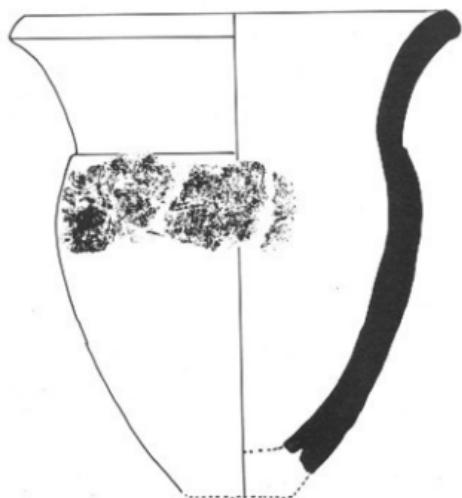
神西式土器実測図



中期弥生土器——その3——

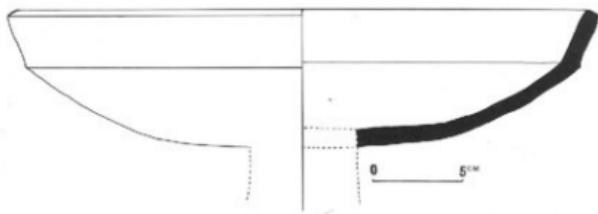
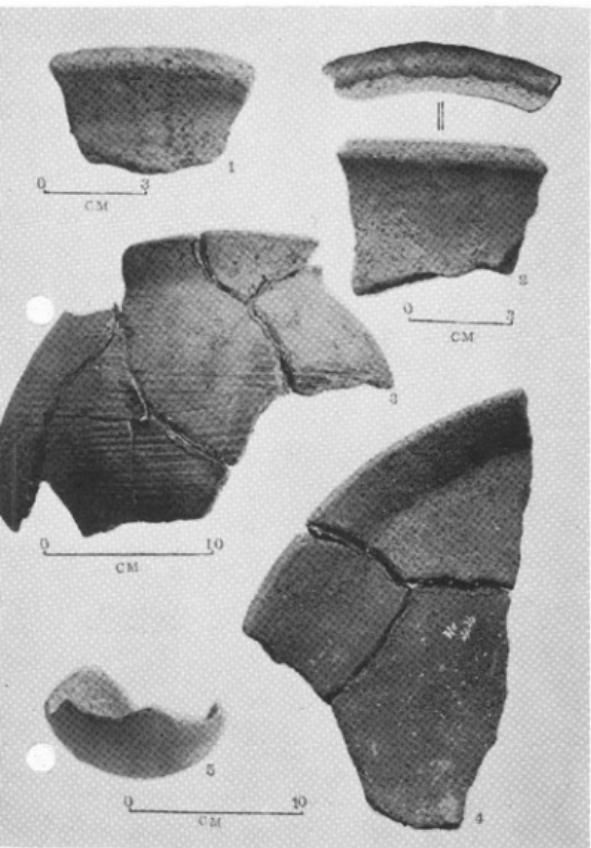
1・2の土器は同一の土器である。神西式土器のなかに入る壺形上器であるが、口縁部に複合部を持たないものである。櫛描三本を使って上弦の重弧文、下弦の重弧文を入れているが、これは櫛描波状文を部分的に手を抜いて描いたものである。3は神西式土器にみられる櫛目文で、中期前半～中葉の櫛目文に比較すると、櫛目が細いところに特色がある。

4・5は神西式壺形の上胴部の文様部を示す。範端の列点文と櫛目文とその上につけられた円形貼布文である。◎は1・2の土器の実測図である。



神西式土器実測図

龍河洞式土器とヒビノキⅡ式土器



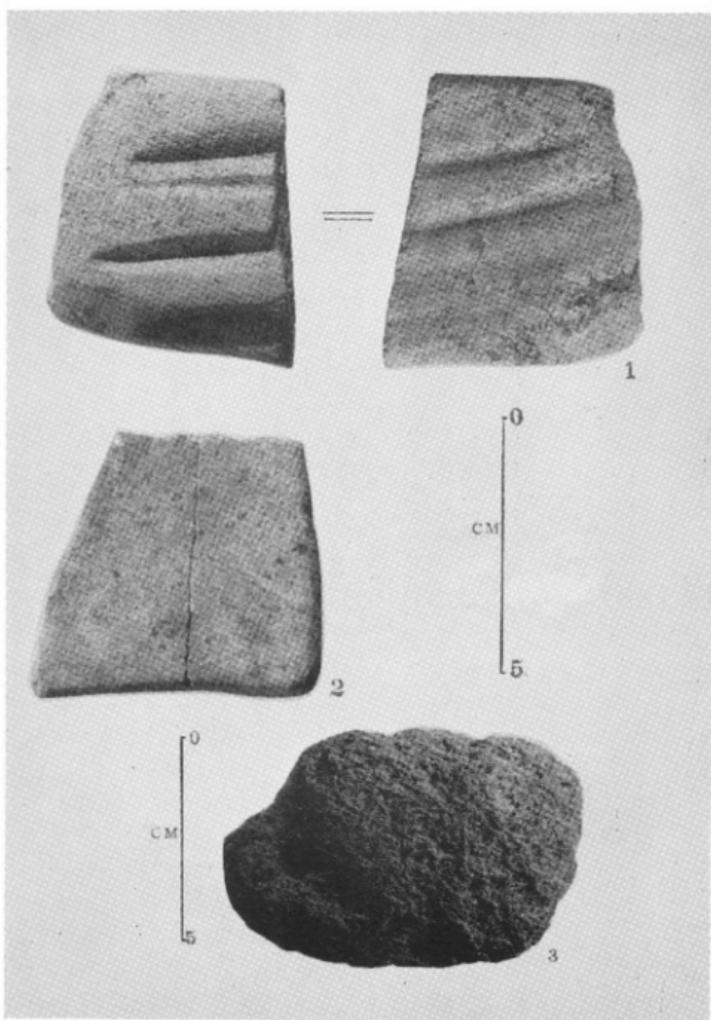
山根遺跡の上層には神西式土器にそれに伴う龍河洞A式土器があることは先述した。1～2は龍河洞A式土器の扁形土器口縁である。1は外反した口縁、そして「く」字状に曲った頭部、これにやや長い胴部のつく扁形である。2は同じタイプの扁形土器であるが、口縁端に一本の凹線を持ち、口縁下に指頭圧痕を入れたものである。弥生中期末の上器である。

3～5は弥生後期終末のヒビノキⅡ式土器である。3は扁形土器で敵目痕が頭部以降に全面につけられるのが、この型式の扁形土器の特色である。住居址の床面にほとんど接して出土しているが、(No.81)これは弥生終末期における搅乱—弥生終末期の遺構構築のための一と考えなければならない。

4は高杯形土器の杯部で、実測図❶を参照いただければよくわかる。口径の大きな高杯であるが、口縁下が立ちあがり稜を持っているところに特色がある。貯藏穴Iの上部やより出土している。(貯藏穴Iの26)

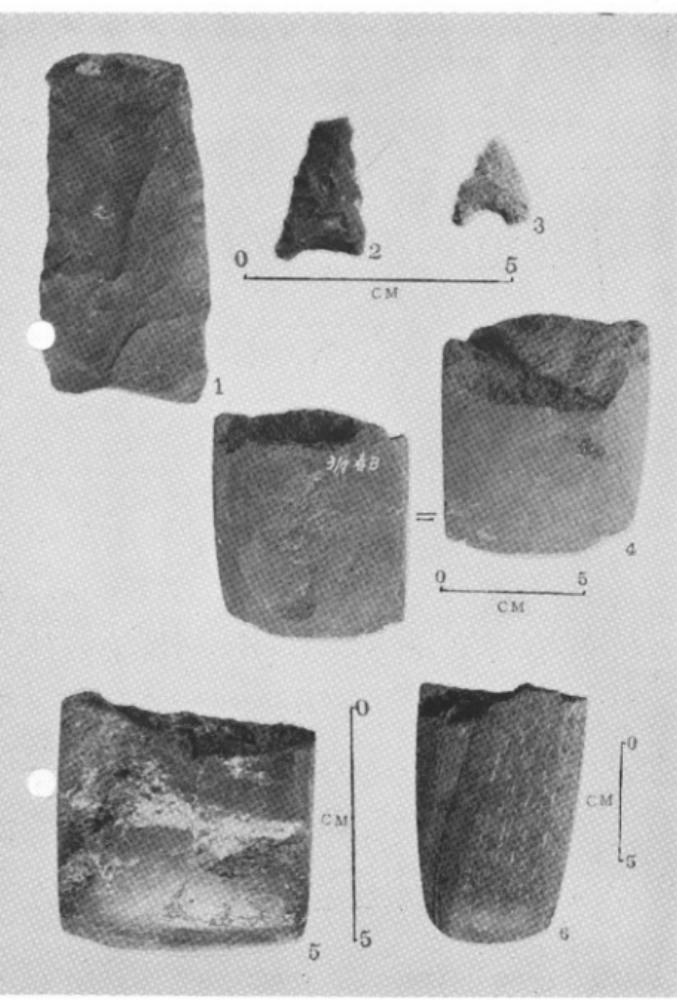
5の土器は小形の壺形土器であるが、底部は小さな平底をなし、やはりヒビノキⅡ式の壺形土器とすべきであろう。Bトレンチの北部より出土し、第3層の黒褐色粘土層より発見されている。これと伴出した土器は、ヒビノキⅡ式土器の壺形口縁1、頭部2、扁形破片2、斜線文のある壺形突帯1がある。

住居址床面出土の砥石類



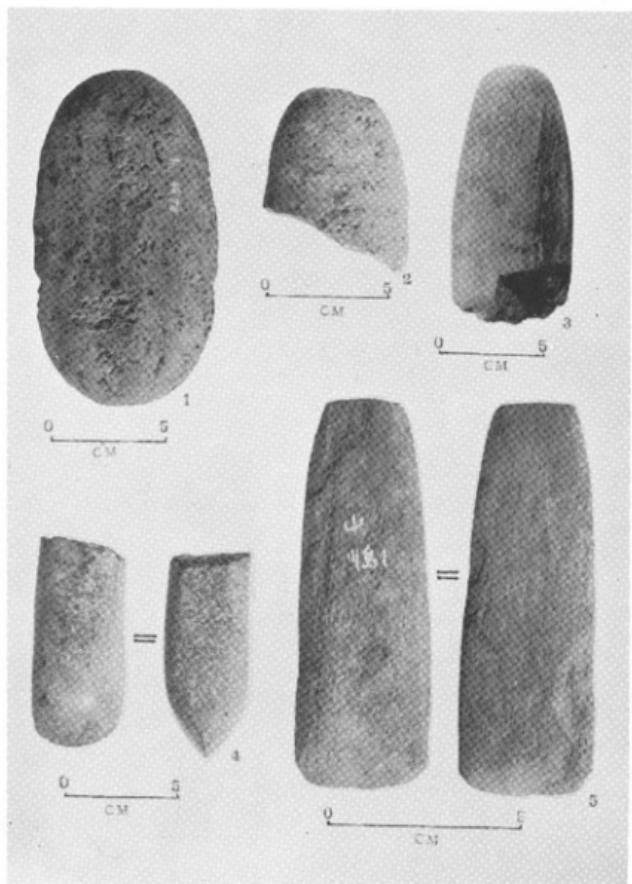
荒い砂岩を利用した砥石で 1・2 とも床面直上から出土している。大篠式土器・田村式土器に伴うものとみてよい。1は内外面に砥いた溝を持つもので、先を尖がらす石器を砥いたものであろう。2は薄い小形の砥石である。小形の石斧を砥いたとみてよかろう。3は軽石で使用痕はないが、住居址床面にあることは、石器の荒砥として使用する目的で住居址まで持ってきていたのであろう。南国市田村西見当遺跡では、軽石を砥石として使用したもののが出土している。

石槍・石鎌・石斧



1は打製石槍で粘板岩で作っている。尖端部・基部ともに折損す。住居址床面より出土す。(No. 68) 2・3は打製石鎌とともに凹基無茎式である。2はチャート製で貯藏穴2 (No.55) より出土。3は粘板岩製で貯藏穴3 (No. 61) より出土す。4・1は柱状片刃石斧、4は残長7.8 cm, 厚さ2.6 cm, 幅6.3 cmで硬質粘板岩で作っている。第二次調査の際Bトレンチより出土す。5は真岩製で扁平片刃石斧、残長5.3 cm, 厚さ1.5 cm, 幅5.5 cmでD地区より大縫式土器に伴って出土している。6は大型蛤刃石斧で、残長11.1 cm, 厚さ3.4 cm, 幅7 cmで輝綠閃緑岩製である。折損したものであるが、貯藏穴1 (No.37) から出土している。

砥石と石斧



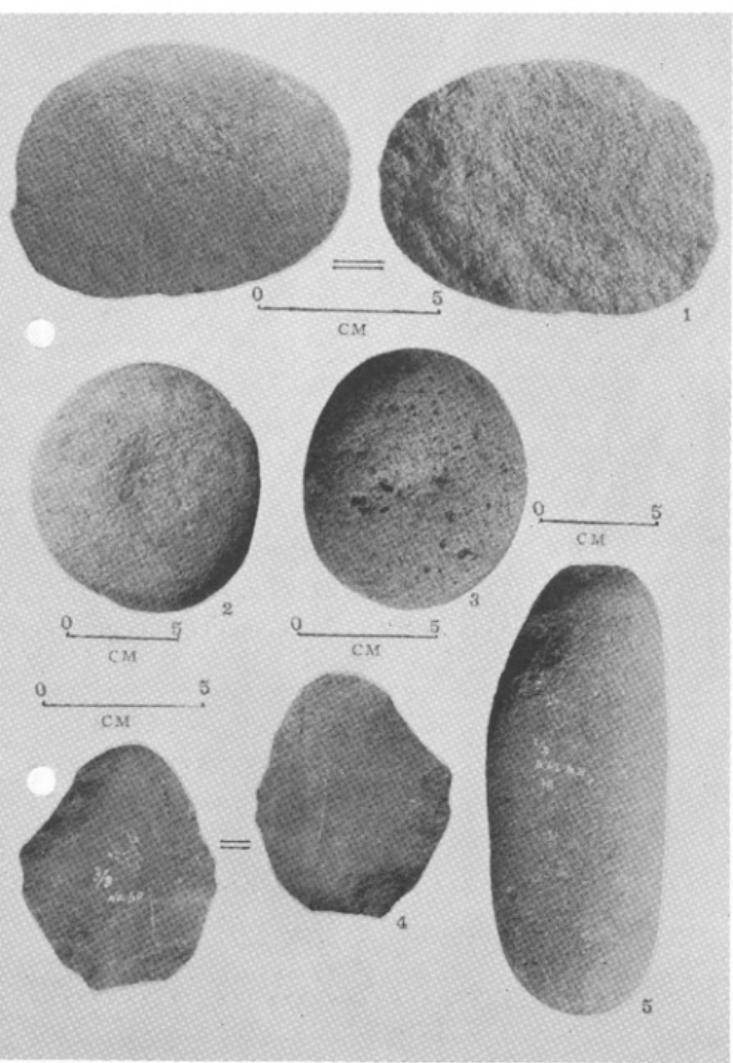
で、これもともに緑泥片岩製である。4は小形の太形蛤刃石斧で、5は柱状片刃石斧である。4～5は中期の弥生土器に伴うものであろう。

1は砥石、軟質粘板岩の自然の楕円礫を砥石として利用し、その後敲石として使用したのであろうか、側面と一方の平たい面に敲打痕がある。砥石としては両面が使われている。住居址の床面上（No.78）から出土している。

2・3は太形蛤刃石斧で、2はその頭頂部しか残っていない。Eトレンチの石鍋出土地点近くから出土しているが、もちろん弥生時代のものであるが、中世において石ころとして使用したものであろう。火にあって石が赤く変色している。頭部には敲打痕がある。3は緑泥片岩製で刃部を欠いでいる。これも住居址床面（No.86）から出土している。

4・5は地元の方の表面採集品

敲石類



1・4は扁平敲石と呼んでいるもので、從来南国市田村西見当遺跡から、数多く発見されているものである。西見当遺跡では前期弥生土器にのみ伴う敲石である。この二個の敲石も住居址に伴う貯蔵穴周辺から出土しているので、大縫式土器に伴うものと考えてよからう。片面は自然礫の面を残し、片面は自然礫を打削した面を残す。そして周辺部に敲打の痕を残すのが特色である。

2・3は平坦面の両面に凹みを持ち、周辺で敲いたもので普通みられる敲石である。二個とも表面採集品である。

5は棒状敲石で第二次調査の際に、住居址の床面直上から出土したもので、大縫式ないし田村式土器に伴うものである。棒状の一方の尖端に敲打した痕がある。

石質は1～5すべて硬質砂岩である。